ドラゴンクエスト?～紡がれし三つの刻（とき）～

乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴンクエスト？～紡がれし三つの刻（とき）～

【Ｎコード】
Ｎ２１３９Ｙ

【作者名】
乱

【あらすじ】
この物語は、メインキャラクターなどを他の作品のキャラクターに置き換えています。
主人公役の横島は転生者でも無く、世界移動した訳でも無く、横島というキャラクターを借りて来た訳です。他のキャラクター達も同様です。
キャラクターに合わせたギャグなどはしょっちゅう入る事がありますが話は基本的に原作に沿って進みます。

ちなみにサブタイトルの「三つの刻（とき）」と言うのはパパス・主人公・勇者の三世代と主人公の幼年期・青年期前半・青年期後半を掛け合わせたつもりです。
それぞれ、一話づつ完成してからうＰしようとしてたけど少しづつでもなるべく毎日更新したいなと思ってこういう形にしました。
本作はＴＩＮＡＭＩにも投稿しています。

Ｌｅｖｅｌ１「帰郷・パパスとタダオ」その１（前書き）

横島を主人公に置き換えたＤＱ?。
そしてビアンカやフローラなども他のキャラに置き換えてます。
パパスなど死んじゃうキャラなどはそのままだけど。

Ｌｅｖｅｌ１「帰郷・パパスとタダオ」その１

カッチコッチ、カッチコッチ、カッチコッチ、カッチコッチ、
コツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツコツ

その広い部屋には時計の音と、その背中に紋章が刻まれた赤いマントを着けた男がうろうろと歩き回る靴の音だけが響いていた。

「パパス王、お気持ちは分かりますが少し落ち着かれてお座りになってはいかがですか？」

大臣であろう一人の男が歩き回っている男に語りかける。

「う、うむ。…そうだな」

パパス王と呼ばれた男はそう言うと玉座に座るが、しばらくすると立ち上がり再びうろうろと歩き回り出す。

そうしていると階段の方から誰かが駆けて来る足音が聞こえて来た。

「パ、パパス様！！　お、お生まれになりました！！」
「何！？　本当か、バークよ！！」
「はい！！　早く王妃様の所に」

「う、うむ！！」

そしてパパスはすぐさま階段を駆け上がって行く。

「で、バーク。それでお子は？パパス王のお子は？」

「お喜び下さい大臣様。それはもう立派な……

パパス王が息を切らせながら出産が終った部屋へと駆け付けると侍女が笑顔で待っていた。

「パパス様、おめでとうございます！本当に可愛い、玉の様な男の子ですよ」

「そ、そうか！！　男の子か！！」

ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、

生まれたばかりの赤ん坊は元気に泣いていて、母親はそんな我が子を愛おしそうに見つめている。

其処に満面の笑みを浮かべたパパスが歩いて来た。

「良く頑張ってくれたな、マーサよ」
「あなた…」
「おお、こんなに元気に泣いて……、
早速だが、この子に名前を付けてやらないとな」
「ええ、そうね」

パパスは顎に手をやり、唸りながら名前を考えている。

「う～む、う～～む……、そうだ！！　良い名が浮かんだぞ。トンヌラ、トンヌラと言うのはどうだ！？」
「……トンヌラ？」
「どうだ、良い名だろう。はっはっはっはっ！！」
「まあ、ステキな名前！いさましくて、かしこそうで……、でも私もこの子の名前を考えていたの。タダオと言うのはどうかしら？」
「そ、そうか……、あまりパッとしない名前だがお前が良いのなら良いと思うぞ」

そしてパパスは我が子を抱き抱えるとその名を呼んだ。

「神から授かった我等の子よ、今日からお前の名はタダオだ！！」
「元気に育ってね、タダオ」

ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、ほぎゃあ、

タダオと名付けられた赤ん坊は二人の腕の中で元気に産声を上げていた。

そして……

ザザーーン、ザザーーン、

波に揺られる船の中の一室で少年は目を覚ました。

「ん～、むにゃむにゃ。父ちゃんおはよ」
「おお、起きたかタダオよ。…どうした？変な顔をして」
「何や変な夢を見たんや。ワイがどっかのお城で生まれる夢なんや」
「はっはっは、それはまた変な夢だな」
「そんでな、変なおっさんがワイにトンヌラっちゅーとんでもない名前を付けようとするんや。…って、どうしたんや父ちゃん？」
「へ、変なおっさん……、とんでもない名前……」ＯＴＬ

パパスは四つん這いになって何やら項垂れていた。

「と、とりあえずこの船旅ももうじき終りだ。今の内に世話になった人達に挨拶をして来なさい」

「分かった。ほな、行って来るわ」

そう言うとタダオは元気に部屋を飛び出して行った。

そんな後ろ姿を見ながら…

「マーサよ、タダオもあんなに大きくなったぞ。早くお前にも会わせてやりたいな。……しかしタダオの奴、あの話し方がすっかり定着してしまったな。何が気に入ったんだか……」

旅の途中、しばらく滞在した村の独特の話し方だがタダオもようやく喋り出した所と言う事もあって、あの話し方で言葉を覚えてしまったのだった。

その格好は白い布の服の上に紫色のマント、頭には赤い布を覆い被せる様に巻いている。

Ｌｅｖｅｌ１「帰郷・パパスとタダオ」その１（後書き）

（、・ω・）やはり子供時代の横島は関西弁の方が似合っているので無理やりだけど設定をねじ込みました。
ちなみにタダオが頭に巻いている赤い布は？の主人公を思い浮かべてくれると解りやすいです。
子供の頃はバンダナよりそういった感じがいいと思ったもので。

Ｌｅｖｅｌ１「帰郷・パパスとタダオ」その２

「お早うや、船長さん」
「おや、タダオくんじゃないか。お早う」
タダオが甲板に出ると船長は船縁から双眼鏡を使って海を監視していた。
「もうじきビスタの港に着く。そうしたらパパスさんやタダオくんともお別れだな、寂しくなるよ」
「そうやな、せっかく船のみんなとも仲良くなれたのに残念や」
寂しそうに俯くタダオの頭を船長は優しく撫でてやる。
「はっはっは、人の縁と言う物はそう容易く切れる物じゃない。何時かまた会えるさ」
「ん～～、むつかしゅうてよく分からんけどまた会えるんならその時が楽しみや」
「そうだな、大きく立派になったタダオくんと再会できるのを楽しみにしてるよ。……ほら、ビスタの港が見えてきた。お父さんを呼んで来なさい」
「うん、分かった」
笑顔で頷くとタダオはパパスを呼ぶ為に駆けて行く。
「……、大きくなったタダオくんか。きっとその時にはタダオ様と呼ばなくてはならないんだろうな。ねえ、デュムパボス・エル・

ケル・グランバニア国王様」

そっと呟いたその言葉はタダオの耳には届く事無く波の音にかき消された。

☆

「父ちゃん、港が見えて来たで」

「ようやく着いたか、村に帰るのも2年ぶりだな。タダオはまだ小さかったから良く覚えていないだろう」

「何となくなら覚えとるで」

「そうか、ならば早く帰ろう。バークが待ってるぞ」

「うん！」

桟橋の所に着くと船長達が誰かを出迎えをしている様だ。

「船長、誰か乗り込んでくるのか？」

「ああ、パパスさん。この船の持ち主のフォーベシイ様ですよ」

「そうか。ならば乗せてもらったお礼と挨拶をしなければならんな」

そして長い黒髪を靡かせながら一人の男が乗り込んで来た。

「フォーベシイ様、お待ちしておりました」
「ああ、出迎え御苦労さま船長。おや、その人達は？」
「私の古い知り合いで船の護衛代わりに同船していただいた…」
「パパスと申します。この度は貴方の船に乗せていただいて大変助かりました」
「いや～、船を護っていただけたんならお互い様ですよ。有り難うございます」

そんな風に二人が握手をしていると紫色の長い髪の小さな女の子が船に乗り込もうとしていた。

「よいしょ、よいしょ」
「おや、ネリネちゃんにはこの入口は高すぎたかな？」

ネリネと呼ばれた女の子が桟橋から船に乗り込もうと四苦八苦していると。

「ほれ」
「え？」

タダオはそんな女の子に手を差し伸べてやる。

「つかまりや」
「あ…は、はい／／／」

女の子は赤くなりながらもその手を掴み、無事に船に乗り込んだ。

「タダオの奴め……」

「ははは、ネリネちゃん。ちゃんとお礼を言うんだよ」
「は、はい。あ、ありがとう…ございます／／／」
そんな時、もう一人の女の子が乗り込んで来た。
「ちょっとネリネ、それに其処の貧相な奴。さっさとどくワケ、おじさんも邪魔なワケ」
黒髪で色黒の女の子はそう言いながらズカズカと歩いて行くと部屋があるであろう扉の中に入って行く。
「これエミ、失礼じゃないか。すみません、礼儀のなってない娘で」
「いや、お気になさらずに。さあタダオ、我等も行くとしよう」
「分かったで父ちゃん、行こか……ん？」
タダオはパパスの後を追って船を降りようとしたがネリネはタダオの手を掴んだまま離そうとしなかった。
「どうしたんや？」
「あ、あの……、お、おなまえ……。わたし、ネリネ／／／」
ネリネはたどたどしくも、タダオに名前を聞く。
「そうか、自己紹介がまだやったな。ワイの名前はタダオや、よろしくなネリネちゃん」
「う、うん……。またね、タダオ……さま…／／／」
そこまで言うとネリネは顔を真っ赤に染めて逃げる様に走り去った。
「？？？父ちゃん、ネリネちゃんどうしたんや？」

「パパスさん……、貴方のお子様は……」
「言わないで下さい……。（これで何本目の旗だ？）」
やはり此処でも彼は鈍感であった。

「では世話になったな、船長。旅の無事を祈ってるぞ」
「ええ、パパスさm……、さんこそお元気で。タダオくん、元気でな。お父さんの様に立派で強い男になるんだぞ」
「うん、船長さんも元気でな。バイバイや」

そして、桟橋と船を繋いでいた橋は下ろされ、船はゆっくりと離れて行く。
タダオが名残惜しそうに船を見送っているとその後ろ側にあるベランダの様な所からネリネが顔を出し、手を振っていた。
少し寂しそうな顔をしながら……。

「またなーー、ネリネちゃ〜〜ん」

タダオもそんなネリネの姿が見えなくなるまで手を振り続けていた。

Ｌｅｖｅｌ１「帰郷・パパスとタダオ」その２（後書き）

ネリネとタダオの話をもっと書き足すべきだったかな？
一応、ネリネの一目ぼれなんだけど…、まあ、ゲーム本編でもあんな感じだったし。

でも、もう少し考えてみるかな？

（、・ω・）ちなみにアンディ役にはピートを用意しています（笑）。つまり、三人目の嫁候補は別の人でしゅ。

Ｌｅｖｅｌ１「帰郷・パパスとタダオ」その３（前書き）

とりあえず、今回で一話目が完成。……はっくしょん！

風邪をひきました。

Ｌｅｖｅｌ１「帰郷・パパスとタダオ」その３

「さて、行くとするか。今からなら夕暮れ時にはサンタローズに帰れるだろう」
「うん、はよ行こ。父ちゃん」
ビスタ港から飛び出したタダオはサンタローズへと続く道を元気に駆けだした。

☆

『ピキーーーッ！！』
「わっ！」
サンタローズへと続く街道を駆けているタダオに、草むらの中から魔物が道を塞ぐかのように飛び出して来た。
「な、何や、スライムか」
タダオの目の前には三匹のスライムが並んでいて、その内の一匹がタダオを睨みつけたかと思うと行き成り飛びかかって来る。
「なんのっ！」

各地を旅して来たタダオは今までもモンスターとの戦闘経験はあり、スライム辺りが相手ならそれほど恐れる相手では無かった。

タダオは背中にしょっていたひのきの棒を掴むと一気にスライムに向けて振り下ろした。

『ピギャーーッ！！』

タダオの一撃を受けたスライムは地面に落ちると弾け飛び、その場所には赤い宝石が残されていた。

魔王の邪悪な波動を受けたモンスター達はその影響を受けて魔力を結晶化させた宝石をその身に宿している。

倒されて命が尽きても宝石は消える事無くその場に残り、その宝石の価値はモンスターの強さに比例して強力なモンスターであればあるほどその純度を増し、より高額で取引される。

「う〜〜ん、２Ｇ（ゴールド）ってところやな」

宝石を日の光に翳しながら鑑定していると他のスライムを退治したパパスがやって来てタダオの頭を撫でる。

「中々見事な一撃だったな、これは将来が楽しみだ」

「へへへ、そやろ？ほい、父ちゃん」

少し照れながらもタダオは手に入れた宝石をパパスに渡そうとするが彼はそれに手をかざして止めた。

「それはお前がスライムを倒して手に入れた物だ。お前が持っていなさい」
「ええんか？」
「ああ、無駄遣いはするんじゃないぞ。それに……」
「それに？」

パパスは厳しさと優しさの入り混じった目でタダオを見つめ、頭を撫でながら言葉を続ける。

「その宝石はお前が奪った命である事は忘れてはならん。たとえ相手がモンスターであろうともだ」
「……うん、モンスターだって生きてるんやもんな」
「分かっていればいいんだ」

宝石を袋にしまい込み、タダオとパパスは再び歩き出す。
それからも何度かモンスターの襲撃を受けるが左程大した相手でも無く、タダオも少し怪我をしたりしたがパパスのホイミによって瞬く間に治療される。

『ピキーーーッ！！』

そして何度目かの闘いの時、タダオは襲い掛かって来たスライムをひのきの棒で撃退する。

『ピキャッ！！』

その攻撃は「会心の一撃」と言うべき威力だったが、不思議な事にスライムは何時もの様に弾け飛ぶ事無く、地面に転がり目を回していた。

「ピキャ〜〜〜ア……」

「あれ？父ちゃん、なんでコイツは宝石にならんのや？」

「こ、これは……、まさか」

タダオは不思議がり、パパスが呆然としているとスライムは徐に起き上がり、タダオを潤んだ目で見上げている。

「ピイ、ピイ」

「何やコイツ、何か言いたいんか？」

「……きっと、友達になりたいんだろう」

「ともだち？ワイはコイツをたおそうとしたんやで？」

「きっとタダオに倒された事で悪い心が無くなったんだろう」

そう言って来るパパスからスライムに目を移すとタダオは笑いながら話しかける。

「じゃあ、ワイといっしょに来るか？」

「ピイーーー、ピッピィーー♪」

スライムはそう誘ってくれたタダオに飛び付くと、喜びながら頭の

上に登り甘える様に体を揺らしている。

「（やはりマーサの子供だな。タダオにも同じ力が宿っていたか）
じゃあ名前を付けてやらねばな。トンヌ…」
「ピエールや！！　お前の名前はピエールやで。……父ちゃん、なにか言ったか？」
「いや……、何でもない…」

パパスはそう言いながら歩き出したがその背中には何処となく哀愁が漂っていた。

そんなパパスを見つめるピエールは安堵の表情をしていたとか。

そして空が茜色に染まり始めた夕暮れ時、二人と一匹は遂にサンタローズへと辿り着いたのだった。

＝冒険の書に記録します＝

《次回予告》

旅を終えてサンタローズに帰って来たワイと父ちゃん。
そこで昔、よく遊んでもらってたレイコ姉ちゃんと再会した。
でも、レイコ姉ちゃんの父ちゃんは病気みたいなんや。
レイコ姉ちゃんの父ちゃんの薬を作る為に薬師のおっちゃんを捜して洞窟を探検や。

次回Ｌｅｖｅｌ２「洞窟の中には」

さあ、ドラクエするで！！

Ｌｅｖｅｌ１「帰郷・パパスとタダオ」その３（後書き）

と、言う訳でスタートした多重クロスキャラによるドラクエ？ストーリー。

何故、タダオが主人公なのにパパス役がタイジュじゃないのか？
それは物語の上でどうしてもパパスの死が免れない為です。

最初はギャグメインで行こうと思ってそれも有りかなと思ってたんですがプロットを立てて行くと結構シリアスな話になって行って、やはり死ぬ役に他のキャラクターを持って来るのは不謹慎かなと言う事で原作通りに父親はパパスのままで行こうとした次第です。

仲間一号のスライムが「スラリン」じゃなく「ピエール」なのはスライムからナイトへの進化フラグだったりする。

敵モンスターの時は『』ですが、味方モンスターになってからは「」と括弧を変えています。
ピエールの声はゴメちゃん風と思っていただければ丁度いいかと。

そしてパパスさんは未だに諦め切れてない様です。

倒されたモンスターがＧ（ゴールド）ではなく宝石を落とすのはアニメドラクエの「アベル伝説」から持って来た設定です。

ちなみに次回予告で解る様にイメージＥＤ曲は「夢を信じて」です。

絵が描ければイメージ画を描くんだけどな。

誰かいないかな～～。

―ω・）チラリ

「取扱説明書」（前書き）

少しでも解りやすくなればと書いてみました。

「取扱説明書」

まずは、この物語の世界観から。

・原作にない村や町などが出てきたりしますが基本的には？の世界。
？の町や国が出て来る事は無い。

・主人公はタダオ。（ＧＳ美神・横島忠夫）本名タダリューオム・
エル・ケル・グランバニア
ビアンカ役はレイコ（ＧＳ美神・美神令子）
フローラ役はネリネ（ＳＨＵＦＦＬＥ！・ネリネ）
デボラ役はエミ（ＧＳ美神・小笠原エミ）
アンディ役はピート（ＧＳ美神・ピート）（オチは分かりますね）
サンチョ役はバーク（Ｔｉｃｋ！Ｔａｃｋ！・バーク）
その他、色んな作品からもキャラクターが出て来ますがそれが誰か
は物語が進んだ先で。

・基本、話は元ゲーのドラクエ？に沿って進みますが当然原作に無
い展開もあります。
（タダオが無自覚の内にあちらこちらで旗を立てまくっているなど）

・パパス、マーサ、ダンカンなど、キャラクターを入れ替えていな
いキャラなども多数出て来ます。
　パパス役を大樹にしようかとも思いましたが、ストーリー上どう
しても死亡フラグは消せないのであえてパパスのままで。

※モンスターを倒した時に得られるＧ（ゴールド）について。

・最初は倒したモンスターを素材として売り払いＧを得るという事

にしようかと思いましたがそれは既にやってる方が居るのでボツ。

・モンスターが冒険者や旅人を襲った際に習性で光り物（G）を盗っていき、それを倒した際に再度手に入れるという方法もありますが、これも既にやってる方が居ると言う事でこれもボツ。

・そこで思い出したのがアニメ版ドラクエ「アベル伝説」の宝石モンスター。

・魔王の魔力によって凶暴化したモンスターの内部で魔力が結晶化、宝石になる。
　その宝石がモンスターを倒した際にG（ゴールド）の代わりの報酬になる。

・つまり、タダオが仲間に出来るのは体内で魔王の魔力が結晶化していないモンスターと言う事。

・タダオが倒す事によってモンスターの体内の魔力は浄化されて結晶化、それが仲間になるモンスター。

・モンスターはドラクエ？には出て来ないモンスターや原作では仲間に出来ないけどこの話では仲間に出来るモンスターなどが出てきたりします。

その他の設定はまた後ほど。

Ｌｅｖｅｌ２「洞窟の中には」その１

～サンタローズ～

船旅を終え、街道を歩くパパスとタダオ、そしてタダオの肩に乗っているピエール。
そんな二人と一匹の前に目的地であるサンタローズの村が見えて来た。

「やっと帰って来たんやな父ちゃん！」
「そうだな、タダオ」

村の入り口には見張りの村人が立っていて、二人を見つけると警戒するがそれがパパスだと気付くと満面の笑みで二人を迎える。

「パパスさん、パパスさんじゃないですか！帰って来たんですね！！」
「おお、エージャないか、長い間留守にしたな。これから暫くはこの村に腰を落ち着けるつもりだ」
「それは皆が喜びますよ。……それはそうと、その子の肩に乗ってるのは…スライム！？」

門番のエーはタダオの肩の上のピエールを見るや否や、槍を向けようとするがパパスは笑みを浮かべながらそれを手で制す。

「心配は要らぬぞ。このスライムは邪気を祓われている、もはや悪さはしない」

「そうやで、ピエールはワイのともだちや！！」
「ピッピィーー」
「君は…タダオくんか。大きくなったな、パパスさんやタダオくんが大丈夫と言うのなら心配はいらないな。じゃあパパスさんが帰って来た事を皆に報告しなきゃ」

そう言うとエーは村へと駆け出し、喜び勇んで村中にパパスが帰って来た事を叫んで回った。

「おぉーーーいっ！！　パパスさん達が帰って来たぞぉーーーーっ！！」

「お帰り、パパスさん」
「やあ、良く帰って来たな！今夜は一杯飲みながら旅の話を聞かせてくれ」
「わあーーいっ！！　パパスさんが帰って来たぁーーー♪」

村人達は皆笑顔で二人を迎え、家が見えて来ると玄関の前に召使いのバークが待っていた。

彼の服装は他の村人達とは違い黒を基調とした、いわゆる執事服である。

バークはタダオ達を見つけると勢いよく走りだした。

「坊っちゃまーーーーっ！！　坊っちゃん、坊っちゃんではないですか！！」
「た、ただいまや、バーク」

バークはタダオに駆け寄ると抱き抱え頬擦りをする。

一見するとかなり危ない光景ではあるが彼のパパスへの忠誠心は偽りなく、彼から寄せられる信頼度も高い為パパスもそれを笑いながら眺めている。

もしこれが、他の男であったならすぐさま切り捨てられていただろう。

「ははは、大きくなられましたな」
「うん。ワイ、大きくなったやろ」
「留守の間ご苦労だったな、バーク」
「パパス様、このバーク、タダオ様とパパス様のお帰りを一日千秋の想いでお待ちしていました」
「うむ、心配をかけて悪かったな」
「さあ、家の中へ」

そしてパパスとタダオは懐かしの我が家へと入って行った。

「お久しぶりです、パパスおじ様」

そう言いながら二階から降りて来たのは栗色の髪を両側で結んだタダオよりも少し年上の女の子だった。

「おや、君は？」

「私の娘だよ」

「マミア、久しぶりだな。するとこの子はダンカンの娘のレイコか」

「ああ、タダオも大きくなったね。二年ぶりだから当たり前といえば当たり前だけどね」

「タダオ、私の事覚えてる？」

「え～～と。……あっ、レイコや！！」

「…2才年上のお姉さんを呼び捨てにするのはこの口かしら？」

そう言いながらレイコはタダオの口を掴み、思いっきり両側に引っ張る。

「いひゃい、いひゃい、ほめんなはい、れひほおねへひゃん！！」

「解ればいいのよ」

「「「はははは」」」

大人達はそんな子供達を微笑ましそうに笑っていた。

「ねえ、タダオ。おじ様達は大人の話があるだろうから私達は二人で遊ばない？」

「うん、遊ぼ」

レイコとタダオはそう言いながら二階へと上がって行った。

「それでマミアよ、何の用事なのだ？私達が帰って来る事を知って

いた訳ではあるまいに」
「ああ、ウチのダンナが病気になってね、薬を調合してもらいに来たんだけど肝心の薬師のビーが洞窟に材料の薬草を取りに行ったまま戻って来ないんだよ」
「う〜〜む、そうか。私もあの洞窟には用事がある。ついでと言っては不謹慎かもしれないが探してみよう」
「頼んだよパパスさん」

Ｌｅｖｅｌ２「洞窟の中には」その１（後書き）

（、・ω・）ルドマン役がフォーベシィなのにサンチョ役がバークなのは、ちょっと違和感。しかし、闘う召使い（執事）を誰にするかと悩んでいるとあの雄叫びが脳の中を駆け巡ったのです。『坊っちゃまーーーーっ！！』と。

Ｌｅｖｅｌ２「洞窟の中には」その２

「ところでタダオ、そのスライムはどうしたの？」
「帰ってくる途中で友だちになったんや、名前はピエール。ピエール、この女の子はレイコ、ワイの姉ちゃんみたいなひとや」
「ピィ、ピッピィー」
「魔物と友だちになるなんて、アンタはホントふしぎな子ね。まあいいわ、私はレイコ、よろしくねピエール」
「ピィーー♪」

笑いながらピエールの頭を撫でてやるとピエールは嬉しそうに鳴きながらレイコの手に頭を擦りつける。

「あいさつは終りやな。じゃあ、何して遊ぶ？レイコお姉ちゃん」
「そうね、なら本を読んであげるわ。この本なんか良さそうね」

レイコは本棚から一冊取り出してペラペラとめくるとそのまま本棚に戻し絵本を取り出す。

「やっぱりタダオには絵本の方がいいわよね」
「読めへんのなら素直にそう言えば…」パコーーンッ！！
「良く聞こえなかったけど何か言ったかしら？」
「……何も言ってません…」
「ピィ～～」

タダオは涙を滲ませ、叩かれた頭を擦りながらレイコと絵本を読んでいく。

ピエールは何やら怯えてる様だ。

《ヤマグチ＝セマシ冒険隊》

冒険家、ヤマグチ＝セマシが世界中の洞窟や未開の地を冒険して回るという話の絵本である。

レイコが机の上に絵本を広げて読み、タダオとピエールはその横から覗き込んでいた。

「『まっくらやみだ、これはなにがおこるかわからないぞ』ヤマグチ＝セマシはいま、だれもはいったことのないどうくつにはいろうとしている」

「なあ、レイコお姉ちゃん」

「どうしたのよタダオ？」

「この絵なんやけど、誰も入った事の無い洞窟やのに何で入って来るカワグチを洞窟の“内側”から描いとるんやろ？」

「……さあ？…、続きを読むわよ。どうくつにはいったカワグチのあしもとにはひとのあたまのほねが……」

「えらいピカピカできれいな骨や…」スコーーーッン！！

レイコのこうげき。

タダオに25のダメージ。

ピエールは逃げ出した。

「……黙って聞いてるって事が出来ないの？」
「……カドは反則や……」
「ピキィ～～～～」

☆

「レイコーー、そろそろ宿に帰りますよ」
「はーい、ママ。じゃあタダオ、またね」
「うん、レイコお姉ちゃん」

レイコ達は宿へと戻り、タダオは一階へと下りて行く。

「さあ、坊っちゃん。今日はこのバークが腕によりをかけて御馳走を作りますからね」
「わーい、楽しみやーー！！」

その日の夕食は思った以上に豪勢で、タダオは久しぶりに腹一杯の食事に満足したようですぐに眠りこんでしまった。

翌日

「ふあぁ～～～、おはようや」

「お早うございます、坊っちゃん。朝食の用意は出来てますよ」
「さあ、早く顔と手を洗って来なさい」
「は〜〜い」

タダオがまだ食べている時、いち早く食事を済ませたパパスは立ち上がるとタダオに話しかける。

「タダオよ、私はこれから用事があるので出かけるが決して一人で村の外へは出てはいかんぞ」
「わかったで、いってらっしゃいや父ちゃん」

食事を続けるタダオをバークは懐かしそうに見ながら呟く。

「本当に坊っちゃんはだんだんとお母上に似て来ましたなぁ。お母上のマーサ様もお優しい方でモンスターさえもマーサ様の前では子猫の様に大人しくなったものです。ちょうどこのピエールの様に」
「ピイ?」
「そうなんか?」
「ええ、本当ですとも。(あんな事さえなければ今頃タダオ様もお城で何不自由無く、幸せに暮らしていたものを……)」
「ごちそうさまや!遊びに行ってくるな。ピエール、行くで」

「ピッ、ピィーー」

昔の事を思い出し、暗い表情になっていたバークだが元気に駆け出すタダオを穏やかな顔で見送る。

「気を付けて下さいね、危ない事はなさらない様に」

「わかっとるって！」

Ｌｅｖｅｌ２「洞窟の中には」その２（後書き）

（、・ω・）川口浩探検隊。幼い頃彼等は私のヒーローでした。本気で信じていた純粋なあの頃にはもう戻れない。

Ｌｅｃｅｌ２「洞窟の中には」その３

村の中を歩くタダオだが、もう春も間近だというのに肌寒さに震えていた。
畑にも作物は実らず、焚き火で暖を取っている村人も居る。
「うう～、寒い寒い。どうしたっていうんだろうね今年は？」

「皆も寒そうやな。早う春が来ればええのにな」
「ピイ、ピイー」

そして、宿屋に着くとタダオは二階に上がりレイコ達が泊っている部屋へと入って行く。

「レイコ姉ちゃん、おはようや」

「おや、坊やはパパスさん所のタダオ君だね」
「うん、レイコ姉ちゃんは？」
「折角遊びに来てくれて悪いんだけどね、レイコはまだ寝てるんだよ」
「まだ？ずいぶんとおねぼうさんやな」

そう言いながらベットで寝ているレイコを覗き込むが、マミヤは寝ているレイコの髪を優しく掻き分けながらタダオに言う。

「この子は病気の父親が心配でね、昨夜も中々寝付けなかったみたいなんだよ」
「そっかー。ゴメンな、わるいこと言ってもうたわ」
「ははは、いいんだよ。だからもう少しレイコを寝かしてやってね」
「うん。じゃあ、また後でな」

そう言いながら部屋を出て、扉を閉めようとするとマミヤの呟きがタダオの耳に聞こえて来た。

「はあ〜、パパスさんも忙しそうだしね。誰か捜しに行ってくれたらねぇ」

宿屋を出て、少し歩いた所でタダオは足を止めるとピエールは不思議そうにタダオを見上げる。

「ピイ?」
「よっしゃ！ピエール、ワイらで薬師のおっちゃんをさがしに行くんや。そうすればレイコ姉ちゃんやおばちゃんもよろこぶで」
「ピイ、ピイピイ」

そして、いざ洞窟に乗り込もうとするのだが流石に武器がひのきの棒では心許無い。

そこで武器屋で新しい武器を買おうとしたら店の親父は。

「ほう、ビーの奴を捜しに行くのか。だったら特別サービスだ、今あるGにひのきの棒を買い取った分を足して銅の剣を売ってやろう。それでもGは足りないんだけどな、坊やの勇気に免じてだからな。他の皆には内緒だぞ」

と、銅の剣を売ってくれた。

「ありがと、おっちゃん。がんばってくるで！」

タダオはそう言うと買ったばかりの銅の剣を腰布に挿し、喜び勇んで駆けて行った。

「ははは、冒険ゴッコか。俺も小さい頃はよくやったものだ」

何と言う事でしょう。この男はタダオが本当に洞窟に入るとは思ってなかった様です。

～サンタローズの洞窟～

洞窟に入ると流石に薄暗くなって来て、ピエールが一緒とは言え不安に駆られて来る様だ。
なのでタダオは歌を歌いながら先に進む事にした。

歌うのはあの絵本が題材になった歌で、あのツッコミ所満載の絵本は小さな子供には結構人気があり、そのツッコミ所をツッコミまくったこの歌は子供達の間で流行っていた。

ガイドラインの問題で掲載できないのが残念だ。

「♪～さそりばちの次はどくいも……」

歌を歌っているタダオの前の方から何やら物音が聞こえて来た。
そして、暗闇の中から出て来たのはスライムとおおきづちの二匹だった。

「ピエール、あいては同じスライムやけどたたかえるか？」
「ピィッ！ピッピィーー！」

ピエールは任せろと言う様に身構えている。
おおきづちは初めて見るモンスターだが、パパスからその特徴などは聞いているので驚く様な事は無かった。

だが、ピエールとは違うその赤く濁った瞳を見ると何処となく寂し

くなるタダオであった。

Ｌｅｖｅｌ２「洞窟の中には」その３（後書き）

（、・ω・）タダオが歌っているあの歌、小説版から持って来たネタでしゅ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2139y/

ドラゴンクエスト?〜紡がれし三つの刻（とき）〜

2011年11月7日08時13分発行